

3-12

主題 病院と施設の狭間で
～重度化していく利用者に何が出来るか～

意識改革

副題 視点を変えたら共に楽になった！

個別ケア

研究期間 5ヶ月

事業所 特別養護老人ホーム 菊かおる園

発表者：CW 松元 悦郎（まつもと えつろう）

アドバイザー

共同研究者：CW 峯田 郁子（みねた いくこ）

電 話 03-3576-2266

メー ル E-mail : kiku@toshimaj.or.jp

FAX 03-3576-2264

URL http://www.toshimaj.or.jp/s_kiku/index.html

今回発表の
事業所や
サービスの
紹介

旧中仙道沿いに立地され、近くにはとげぬき地蔵尊がある。
特別養護老人ホーム（90床）、ショートステイ（10床）、ケアハウス（30
部屋）デイサービス、居宅介護支援事業所、高齢者総合相談センターが併設さ
れている。

《研究前の状況と課題》

当施設利用者A氏

年齢：90代女性 介護度3→4（7月に変更）
本年2月に腸閉塞にて入院。

以前は自立心が強く、服装や健康（特に食事）に
こだわりを持っていた。

病院での生活も、こだわりがある故、訴えも多く
対応困難な為、治療途中での退院という状況が繰
り返され、徐々に食事をはじめ生活全般に制限が
出てきた。このような背景から、ストレスが溜ま
る共に生活に活気が無くなり、認知症の進行が見
られてきた。

現在は、夜間帯特に、「眠れない」「のどが渇いた」
「変な夢をみた」などNC頻回。職員の対応に困
難さがみられるようになった。

今後A氏の意欲低下を招かず、医療と介護の狭間
にいる利用者に、今私達に何が出来るかを考えて
みた。

《研究の目標と期待する成果》

目標：職員のケアの目線を変えることで、
A氏らしさを取り戻してもらう。

期待する成果

：A氏を通して、これから重度化してい
く利用者を前向きに捉え、対応してい
く。そのケアに対する職員の意識が変
わっていくことを期待して、研究に取り
組んだ。

《具体的な取り組みの内容》

対象者：フロア職員 20名

取組手法：アンケート・ミーティングの実施
これらから導き出された職員の
アイディアの実施

職員構成：A氏担当職員・担当CMを中心と
したフロア全職員

手順：①職員への取組
アンケート
（施設と病院の狭間にいる利用者を
ケアする上での不安の有無など）
↓
ミーティング
（A氏ケアの方向性と職員の不安解消
の方法など）
②A氏への取組
ニーズ・満足度の確認

連携部署：医務・SW・PT・栄養

ポイント：アンケート・ミーティングを通し
て、ケアの視点をどのように変え
られるか。

《取り組みの結果と評価》

A氏

①ご本人の訴えそのままの対応をし“その場
しのぎ”となっていしまっていたケアの視
点を変えることで、ニーズが明確となり、
不安の解消へと繋がった。

②満足度が上がったことで、心身の安定が図
れ、A氏『らしさ』が垣間見られるよう
になった。

職員

①漠然としていた個別ケアの概念が、意識が
変わっていくことで、本来の在り方を再認
識できた。

②職員自身も重度化していく利用者の対応
への不安軽減に繋がり、以前に比べ自信が
ついたように思われる。

《まとめ》

今回の取組を通して、今後増えていくであろ
う『重度化していく利用者』へのケアに活か
していきたい。

《提案と発信》

定型的なルーティーン業務となりがちな施設介護の場において
取り組みを通して職員全員へ創意と工夫の発揮の場を与え
創造型ヒューマンワークとしての介護職の魅力を再構築して行こう！

【メモ欄】追加資料 有 無

注：参加者が自由に記入できるスペースです。空欄のまま提出下さい。